

反核医師の会・学生会で活躍する ユース・松久 凌大さんに訊く

以下は、2026年1月9日、松久凌大さんにオンラインでインタビューを行った内容を編集部がまとめたものである（文責：事務局）。聞き手は、日本反核法律家協会の田中恭子事務局が務めた。文中の脚注は一部を除き編集部による。

松久 凌大（まつひさ・りょうた）さん

長野県下伊那郡松川町出身。秋田大学医学部医学科5年次。秋田大学高齢者医療先端研究センターに所属し、秋田大学医学部附属病院等での実習後、現在は地域の医療機関で実習中。医療と地域・社会との関わりを見つめながら、将来は認知症診療に携わりたいことをめざす。反核医師の会・学生会¹事務局長。

プロフィール



松久 凌大さん

—本日は、よろしくお願いたします。今、実習期間中とのことですが…。

4年生の10月から翌5年生の7月までは、秋田大学医学部附属病院で20ほどの診療科を順次回って実習しました。5年生の秋口からは3週間ほど地域の病院で地域医療実習をし、その後は5週間ずつ、自分で選んだ診療科または病院で、各自の興味関心に応じて実習していきます。私自身は、地域の中核病院と秋田県内の国立病院で、小児科、外科、神経内科の診療、秋田大学法医学講座で、ご遺体の解剖実習に携わり死因究明の現場を学びました。今は、また地域の病院で外科の実習中です。

—数々の診療科のなかでも、とりわけ認知症診療に携わろうと思われたのは？

小学生の時の曾祖母の喪失体験から認知症の問題に取り組みたいと思っていまし

た。高校時代に、東北大学の加齢医学研究所所長をされていた川島隆太先生の著書に出会って、薬に頼るだけではない認知症の療法、楽しみながら改善につながる学習療法があることを知りました。認知症に対して、原因究明に限らず、幅広いアプローチが可能だと知って、学習というこれまで医学の中ではあまり取り扱われてこなかった



インタビュアー・田中事務局

1 反核医師の会学生会連絡先 e-mail: hankakugakusei@gmail.com

方法を使うこともできるのだということに目を啓かれました。

いろいろ調べていくうちに、以前は痴呆症と呼ばれ差別されてきた認知症も、その概念自体が社会的に形成されてきたものであることを学び、認知症と社会の関わりはとて深いことに気付きました。それが一つの起点となって、医療と社会、社会構造との関りを考えるようになったと思います。

将来は、地元に戻って地域の医療者として、行政や学校、NPOなど社会的な活動をしている団体とも連携して、さまざまなファクターをつなぐ地域のハブになるような医者をめざしたいと考えています。

——医療と社会との関わりという観点、医療者が反核平和運動に取り組む原点ともいえそうですね。今、反核医師の会学生部会の事務局長をお務めですが、ご自身は、そもそもいつ頃から反核平和の問題に関心をもつようになったのでしょうか。

両親が共働きだったので、子どもの頃祖母の家に預けられることが多く、祖母た

ちからは戦争の時代についていろいろな話を聞く機会に恵まれました。亡くなった数多くの兵士や空襲被害者、生き残った方たちも貧困に苦しみ、身売りが横行したり自死を選ぶしかなくなったりした方たちの状況がつぶさに語られ、戦争は嫌だと強く思うようになりました。今の平和も当たり前なものではない、これらのことを語り継いでくださった方たちの力があってこそそのものですし、今を生きる自分が何を引き継いでいくべきなのか、ということを考えてようになって、それが今の活動につながっている気がします。

私の故郷、長野県飯田・下伊那地域は、全国でも満州移民を最も多く送り出しました。蚕産業が盛んだった地域でしたが、昭和恐慌以降、蚕産業がたちゆかず、貧困の中で満州へと送り出されていました。長野県の教育政策としても、満州に若い人を送ろうという動きがあったと聞いています。満州移民が現地で何をされたのか、そして何をしたのか、こういったことを中学時代、信州探訪という戦跡をたどる平和教育の中で学びました。



2025年度フィールドワーク 無言館前にて 写真提供：松久凌大

長野県全域、いたるところに加害の歴史が残っています。満州に人を送って、元々住んでいた人たちを追い出して日本に強制的に連行してくる、もちろん朝鮮半島からも。戦争末期、松代大本営をつくるために、苛酷な環境で無理やり働かされたのはそういった人たちです。被害者であると同時に加害者になってしまう仕組み、その強制力こそ戦争の本質だということを、加害の歴史を記録してきた先人の多い長野という環境で学び、それが今の活動につながっていると思います。学生部会は、2018年頃から毎年、広島と長崎を隔年で訪れるフィールドワークを行ってきましたが、2025年のフィールドワークは、長野県で行いました。

——現地に行って肌で感じるというのはとても重要ですね。学生部会では日常的にはどんな活動に取り組んでおられますか？

主に3つ挙げられます。一つ目には毎月定例のミーティングを行って、メンバーの活動報告を受けたり学習をしたりしています。今、学生部会には対外的に示せるよう

な綱領的なものがないのですが、それをつくって外部に発信していけるようにしようというプロジェクトも始まっています。

二つ目には、新たに分科会活動を始めたことです。貧困、歴史、思想、この3つの分科会のいずれかにメンバーがかかわって、3つの側面から核兵器問題にアプローチするという取り組みです。これまで医療とのかかわりで核兵器を捉えることを軸にしてきましたが、学生の立場ですと、医療者以上の発言力や説得力は限られます。そこで、学生ならではの強みを生かし、貧困、歴史、あるいは思想・哲学、これらの側面から核兵器はどう位置付けられるのかということ、その分野の非専門家ながら、知恵を出し合いつつディスカッションしつつ、掘り下げていこうとしています。

三つ目として、意識的に他の市民団体とつながりをつくって連携を深めていく活動に取り組んでいます。例えば、2025年2月の「核兵器をなくす国際市民フォーラム」²で共同企画を行ったANT Hiroshimaとはその後も交流しています。ANT Hiroshima



松代大本営象山地下壕で学ぶ 写真提供：松久凌大

2 詳細 <https://2025forum.nuclearabolitionjpn.com/> から閲覧可能。

は地域に根を張って活動されていますが、インターンとして留学生が参加しておられますので、他国からは日本の被爆がどうみえるのかといったことを学んだりしました。

これらの活動を通して、学生部会は「異分野融合」を旗印に、多面的な展開をめざしてフィールドワークなどの活動報告集を作成して広げようと、対外的な発信力を高める努力をしているところです。学生組織なので順次卒業していくわけですが、全国医学生ゼミナールや民医連³の企画の中で自己紹介や活動報告をさせてもらったりして、その中で興味を持ってくれた学生に声をかけて新たに入会してもらうなど工夫しています。また、フィールドワークをきっかけに入会される学生も多いです。

——医療者・医学生が反核平和の運動にかかわる意義は、どんなところにあると思われますか？

前提として、医療行為は平和でないと成り立ちません。ガザやウクライナの状況を見てみると、医療機関、特に産婦人科を狙って爆撃したりしています。平和でないと医療者は自分の仕事ができない。私が本来やりたいこと、認知症を中心とした地域医療に取り組みたいと思っていますが、とりわけこうした分野は、余裕がないところでははじき出されてしまいます。戦争状態になれば、医者はまず外傷の治療に駆り出されます。

そればかりでなく、先の戦争では、医療者が戦時中に行った加害行為が数多くあります。731部隊のように、捕まえた人に無理やり人体実験を行うなど、生きたまま酷いことを医師が率先して行ったり、唯一地上戦のあった沖縄では、女学生が強制的に

看護に駆り出され、日本軍の撤収時には、傷病兵に医師が青酸カリを投与したり。このように医師や医療者が、命を救うためではなく、殺すための道具に使われてしまうのが戦争だということを、若手医療者のフィールドワークを通じて学びました。

医療という仕事は、人の生活と健康を守り支えるものだと思いますが、戦争はそれを真っ向から否定してしまいます。医療行為、医者存在意義が否定し尽くされてしまう。だから私たちは、自分の仕事の邪魔をさせないために、公衆衛生を全うするために、戦争に反対していきます。

ひとたび戦争が始まってしまえば、反対するのはとても難しくなります。かつては治安維持法、今はスパイ防止法案が国会に提出されていますが、まだ今なら声を上げることができます。声を上げられるときにそれをしないことは、医療専門職としての自死を意味します。

——これから運動を進めていくうえで、何が重要になるでしょうか。今一番訴えたいことをお話してください。

多様性を認めることがとても大切だと思います。今、日本国内でも排外主義が蔓延していて、高市首相の発言を受けて日中関係も非常に悪化しています。そうした状況下で戦争の口実がつくられていくのではないのでしょうか。「正しい戦争」「聖戦」の根拠として、相手は悪魔だ、鬼だ、人間じゃないのだから攻撃してもいい、攻撃すべきだという考え方が使われてしまう。自分と同質なものしか認めない、自分と異なる他者を受け入れない姿勢は、差別を生み、バイアスがかかって相手を理解しようとしなくなります。

多様性を認めるとは、決してきれいご

3 全日本民医連について、<https://www.min-iren.gr.jp/> 参照。

とではなく、自分が想像し得ない、想像したらその存在を否定したくなるような他者が、この世界にはいるということを認めることなのだ、という趣旨のことを作家の朝井リョウさんは著書『正欲』⁴で書いていますが、その通りだと思います。誰一人同じ人間はいない、という当たり前の前提をみなで共有し、それでも皆が社会で暮らしていけるようにするためには、対立ではなく対話が必要です。多様性を認め、自分と異なる人たちと話し合う努力が求められるのではないのでしょうか。異分野の専門家と対話することから私たちは多くを学べます。その意味でも、法律家協会の皆さんとは今後も連携させてもらいたいと思っています。

少し話は変わりますが、2023年4月にケニアのモンバサで開催されたIPPNW（核戦争防止国際医師会議）の世界大会⁵に送り出してもらいました。印象的だったのは、議場の雰囲気がとてもフラットだったことです。ユースのセッションの最後に、若手や学生が前に集まって、ベテランの先生方に「有難うございました！これからもよろしくお願いします」と言ったところ、ベテランの先生からも「こちらこそ有難う。若者のエネルギーで我々も頑張れる」という応答があり、「若者のエネルギーとベテランの知恵」を合言葉に連帯しようという温かいムードが生まれました。

若手にはお金も経験ありませんが、行

動力だけはあります。ベテランの先生方と連携できれば、活動の幅が大きく広がります。一方で、課題もあります。この間反核医師の会では、若手や私たち学生部会の声をずいぶんあげてくれるようになりましたが、まだ「盛り上げ要員」の域を出ていないなと感じることはあります。若手に励まされてよかったというだけで終わってしまって、若手・学生とベテランとの協働関係、主体同士の連携という動きがまだ不足しているので、その点を強化していかなくてはと思っています。

国際会議に参加して、さまざまな反核団体が活動しているけれども、団体ごとの活動がバラバラになっているのではないかということも痛感しました。「市民外交」というと一般的には日本と他国の市民同士が交流するというイメージですが、今、必要なのは日本国内の団体同士の交流、「市民団体外交」ではないかと思っています。各団体に歴史的背景があるかもしれないけれど、それによって同じ目標を掲げる団体同士の連携が阻害されるのはもったいないし、そこを飛び越えられるのは、しがらみのない分、若手の力ではないかと思います。私自身も、今後いっそう市民団体同士をつなぐ活動に力を注ぎたいと考えています。

——今日は、長時間にわたり貴重なお話をいただき、有難うございました。



4 朝井リョウ著『正欲』新潮社 <https://www.shinchosha.co.jp/book/126933/preview/> 参照。

5 The XXIII IPPNW World Congress <https://peaceandhealthblog.com/2024/01/08/we-are-stronger-together-reflections-on-2023/> 参照。